

数值計算法 (8)

担当：櫻井 鉄也，今倉 曜，二村 保徳

TA：加藤駿介

今日の講義内容

□ 今日の授業

- 連立一次方程式
 - 連立一次方程式の概要
 - 行列とベクトルを用いた表現
- 数値解法
 - LU分解
 - 前進・後退代入

今日の授業

連立一次方程式

連立一次方程式の概要

□ 連立一次方程式の例

- 例：鶴亀算・怪獣算

- 鶴と亀がいます。合わせて頭が8つ足が26本ありました。鶴と亀はそれぞれ何匹いますか？

$$\begin{cases} \text{頭の式} & x + y = 8 \\ \text{足の式} & 2x + 4y = 26 \end{cases} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 8 \\ 26 \end{pmatrix}$$

- ゴジラとモスラとキングギドラがいます。合わせて頭が8つ、足が24本、尻尾が4本ありました。ゴジラとモスラとキングギドラはそれぞれ何匹いますか？

$$\begin{cases} \text{頭の式} & x + y + 3z = 8 \\ \text{足の式} & 2x + 6y + 2z = 24 \\ \text{尻尾の式} & x + 2z = 4 \end{cases} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 3 \\ 2 & 6 & 2 \\ 1 & 0 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 8 \\ 24 \\ 4 \end{pmatrix}$$

連立一次方程式の概要

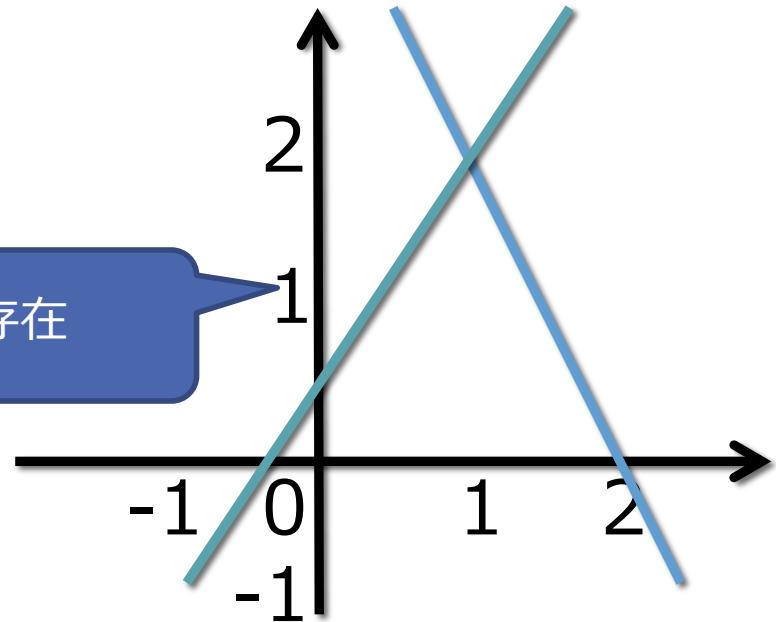
□ 連立一次方程式の解の分類

- 例 1
- 方程式

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 3 & -2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4 \\ -1 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} 2x + y = 4 \\ 3x - 2y = -1 \end{cases}$$

- 解 (交点が解)

解は唯一存在



このとき2つの直線の交わる点が解。

連立一次方程式の概要

□ 連立一次方程式の解の分類

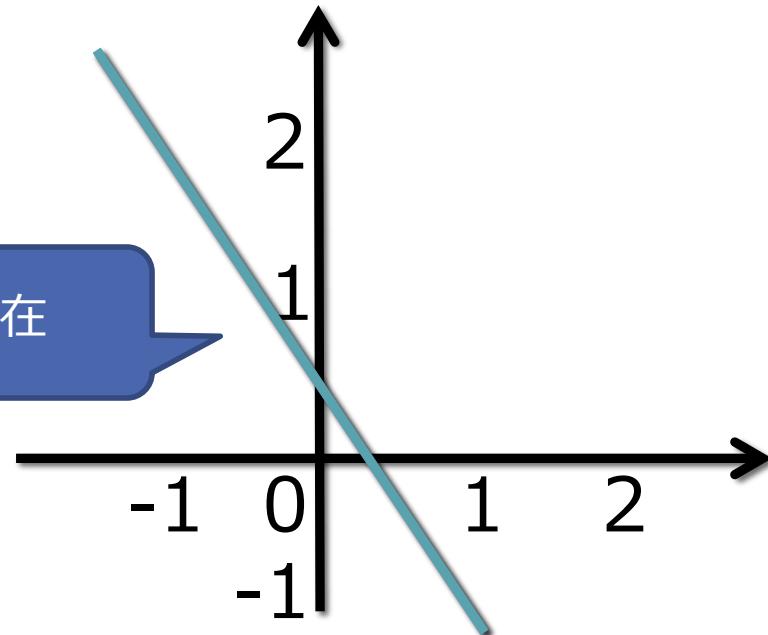
- 例 2

- 方程式

$$\begin{pmatrix} 3 & 2 \\ 6 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} 3x + 2y = 1 \\ 6x + 4y = 2 \end{cases}$$

- 解 (交点が解)

解は無限に存在



2つの直線が重なる場合。

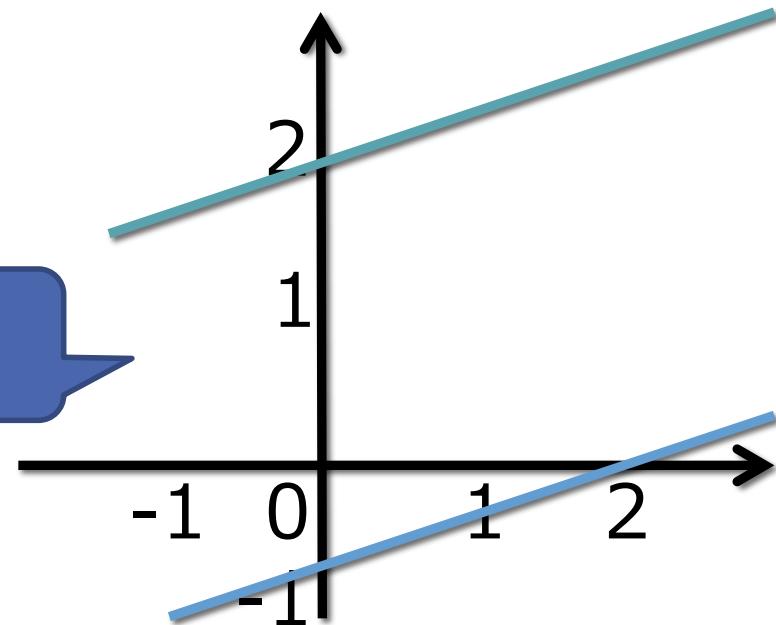
連立一次方程式の概要

□ 連立一次方程式の解の分類

- 例 3
- 方程式

$$\begin{pmatrix} -1 & 3 \\ 2 & -6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ -12 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} -x + 3y = -2 \\ 2x - 6y = -12 \end{cases}$$

- 解 (交点が解)



解は存在しない

このとき、2つの直線が平行であるため、交わらず解が存在しない。

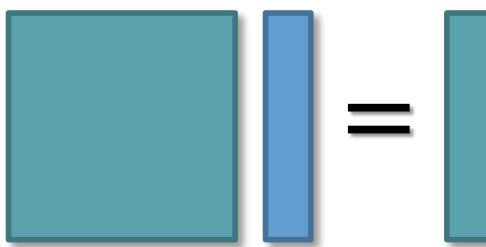
行列とベクトルを用いた表現

□ 連立一次方程式の行列とベクトルを用いた表現

- 入力 : $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$, $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$ 出力 : $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

$$\Leftrightarrow A\mathbf{x} = \mathbf{b}$$


一般に変数がn個の場合を行列とベクトルを用いて表現する。

連立一次方程式の分類

□ 連立一次方程式の分類と解

- 係数行列 A が正則
 - 解は唯一存在する: $x = A^{-1}b$

- 係数行列 A が特異かつ $b \in \text{Ran}(A) := \{Ax | x \in \mathbb{C}\}$
 - $Ax_0 = b$ を満たす解 x_0 が存在する. また,
 $x_0 + v, v \in \text{Ker}(A) := \{x | Ax = 0\}$ も解である.
- 係数行列 A が特異かつ
 - 解は存在しない. $b \notin \text{Ran}(A) := \{Ax | x \in \mathbb{C}\}$

連立一次方程式の数値解法

連立一次方程式の数値解法

□ 連立一次方程式の分類と解

- 係数行列 A が正則
 - 解は唯一存在する: $x = A^{-1}b$

- $x = A^{-1}b$ の（数学的な）計算法
 - 逆行列を陽的に計算

$$C = A^{-1} \rightarrow x = Cb$$

- Cramerの公式

$$x_i = \frac{\det A_i}{\det A} \quad A_i = [a_1, \dots, a_{i-1}, b, a_{i+1}, \dots, a_n]$$

- どちらも計算量が多すぎるため行うべきではない

ここで「陽的に計算」とは、 C を2次元配列として計算して保持したのち、 C と b の積を計算するという意味。

連立一次方程式の数値解法

□ 直接法と反復法

- 直接法：有限回の演算で解を計算

$$A \begin{pmatrix} x \\ x \end{pmatrix} = b \longrightarrow \begin{pmatrix} x \\ x \end{pmatrix}$$

- 系数行列の分解に基づく
- 反復法：解に収束する近似解列を逐次的に生成

$$\begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ \vdots \\ x_{k-1} \\ x_k \end{pmatrix} \approx x$$

- 定常反復法 (Jacobi法など)
- Krylov部分空間法 (共役勾配法など)
- その他

直接法には後述するガウスの消去法やLU分解を用いた方法などがある。

本講義では直接法について説明する。

連立一次方程式の数値解法

□ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- 1行目を $-\frac{a_{21}}{a_{11}}$ 倍し、2行目に加える→(2,1)要素がゼロに

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ \boxed{\text{ゼロ}} a_{22}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{2n}^{(2)}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{array} \right.$$

連立一次方程式の数値解法

□ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- 1ステップ目（1列目の2行目以降を消去）

前ページと同様に、一番下の行まで1列目の項をゼロにしていく。

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{22}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{2n}^{(2)}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{n2}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{nn}^{(2)}x_n = b_n^{(2)} \end{array} \right.$$

連立一次方程式の数値解法

□ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- 2ステップ目（2列目の3行目以降を消去）

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ \boxed{a_{21}}x_1 + \boxed{a_{22}}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n^{(3)} \end{array} \right.$$

連立一次方程式の数値解法

□ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- n-1ステップ目 (n-1列目のn行目を消去)

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{22}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{2n}^{(2)}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{nn}^{(n)}x_n = b_n^{(n)} \end{array} \right.$$

ゼロ

連立一次方程式の数値解法

□ 後退代入

- 上三角化された連立一次方程式を、
 x_n から順に後退方向に代入し解く

$$\left\{ \begin{array}{l} a_{11}x_1 + \cdots + a_{1,n-1}x_{n-1} + a_{1n}x_n = b_1 \\ \vdots \\ a_{n-1,n-1}^{(n-1)}x_{n-1} + a_{n-1,n}^{(n-1)}x_n = b_{n-1}^{(n-1)} \\ a_{nn}^{(n)}x_n = b_n^{(n)} \end{array} \right.$$

- $x_n = b_n^{(n)} / a_{nn}^{(n)}$
- $x_{n-1} = (b_{n-1}^{(n-1)} - a_{n-1,n}^{(n-1)}x_n) / a_{n-1,n-1}^{(n-1)}$
- $x_k = (b_k^{(k)} - a_{k,k+1}^{(k)}x_{k+1} - \cdots - a_{k,n}^{(k)}x_n) / a_{kk}^{(k)}$

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解

- 系数行列 A を2つの行列 L と U の積

$$A = LU \quad A = \begin{matrix} L \\ U \end{matrix}$$

に分解する

- L : 対角要素が全て1の下三角行列
(下三角行列 : 対角より上の要素が全てゼロの行列)
- U : 上三角行列 (対角より下の要素が全てゼロの行列)

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解による連立一次方程式の求解

- 系数行列 A のLU分解を用いると、連立一次方程式は

$$Ax = b \quad \rightarrow \quad LUx = b$$

と表される

- ここで、 $y = Ux$ と置くと

$$L(Ux) = Ly = b$$

となり、この方程式を y について解き、次いで以下を解く

$$Ux = y$$

- L, U は三角行列であるため、前進・後退代入を用いて、簡単に解くことができる

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- Gaussの消去法の行列形式での表現（に近い）
- 行列 $P_{ij}(\alpha), i \neq j$ を

$$P_{ij}(\alpha) := I + \alpha e_i e_j^T$$

と置く。ここで、 I は単位行列、 e_i は単位ベクトルである

- A の第 j 行に α をかけて、第 i 行に加える操作

$$P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha e_i e_j^T A$$

Aの第 j 行目を取り出す

i行目に第 j 行目の値を並べる

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- $e_j^T A$

$$\begin{matrix} & j \\ \cdots & 0 & 1 & 0 & \cdots \end{matrix} \quad \boxed{A(j,:)} =$$

- $e_i(e_j^T A)$

$$i \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} \quad \boxed{A(j,:)} = \quad i \boxed{A(j,:)}$$

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- $P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha e_i e_j^T A$

$$= \boxed{A} + \alpha \boxed{i} \begin{matrix} \\ A(j,:) \\ \end{matrix}$$

A の第 j 行に α をかけて、
第 i 行に加える操作

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- A に対し, $P_{ij}(\alpha)$ を左から順に作用させることで、上三角行列 U を生成する
(Gaussの消去法と同じ手順)

$$P^{(k)}(\alpha^{(k)}) \cdots P^{(1)}(\alpha^{(1)})A = U$$

- 作用させた $P_{ij}(\alpha)$ の積（の逆行列）から下三角行列 L が生成される

$$A = \left(P^{(k)}(\alpha^{(k)}) \cdots P^{(1)}(\alpha^{(1)}) \right)^{-1} U = LU$$

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- 具体例

$$A = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & -1 \\ -1 & 1 & -1 \end{bmatrix}$$
$$\alpha_{21} = -\frac{a_{21}}{a_{11}}$$

- (2,1)要素の消去: $P_{2,1}(-1/2)$ を A に左からかける
- (3,1)要素の消去: さらに $P_{3,1}(1/2)$ を左からかける
- 以上の操作を以下のように書く

$$\alpha_{31} = -\frac{a_{31}}{a_{11}}$$

$$M^{(1)} = P_{3,1}(1/2)P_{2,1}(-1/2)$$

$$A^{(1)} = P_{3,1}(1/2)P_{2,1}(-1/2)A = M^{(1)}A$$

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- つづき
- 同様に、第2列の消去を行う行列を $M^{(2)}$ とし、消去後の行列を

$$A^{(2)} = M^{(2)} A^{(1)} = M^{(2)} M^{(1)} A$$

とする。ここで、 $A^{(2)}$ は上三角行列となる。

- $U = A^{(2)} = M^{(2)} M^{(1)} A$ および $L = (M^{(2)} M^{(1)})^{-1}$

と置くと、

$$A = (M^{(2)} M^{(1)})^{-1} U = L U$$

と表される。

- P_{ij} ($i > j$)は下三角行列なので、 L は下三角行列になる

αの値は $A^{(1)}$ から決定する

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- 注意

- 実際にLU分解を行うときには、行列 $P_{ij}(\alpha)$ を陽に A にかけるような計算は行わず、行同士の消去の計算を行う。
- また、 L の計算でも $M^{(1)}$ などの逆行列を計算することはしない。
- 代わりに行列 $P_{ij}(\alpha)$ の性質を利用する

$$P_{ij}^{-1}(\alpha) = \boxed{?}$$

$$P_{i'j}(\alpha') P_{ij}(\alpha) = \boxed{?}$$

P_{ij} の性質を利用する
と P_{ij} の逆行列とベクトルの積は簡単に計算
できる。

どのように計算するの
だろうか？

連立一次方程式の数値解法（再掲）

□ LU分解の計算法

- $P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha e_i e_j^T A$

$$= \boxed{A} + \alpha \boxed{i} \begin{matrix} A(j,:) \\ \vdots \end{matrix}$$

先ほど示したスライドの式を思い出す。

A の第 j 行に α をかけて、
第 i 行に加える操作

連立一次方程式の数値解法

□ LU分解の計算法

- 注意

- 実際にLU 分解を行うときには、行列 $P_{ij}(\alpha)$ を陽に A にかけるような計算は行わず、行同士の消去の計算を行う。
- また、 L の計算でも $M^{(1)}$ などの逆行列を計算することはしない。
- 代わりに行列 $P_{ij}(\alpha)$ の性質を利用する

$$P_{ij}^{-1}(\alpha) = P_{ij}(-\alpha) = I - \alpha e_i e_j^T$$

$$P_{i'j}(\alpha') P_{ij}(\alpha) = I + (\alpha e_i + \alpha' e_{i'}) e_j^T$$

実は P_{ij} に $-\alpha$ を入れたものが α を入れたものの逆行列になる。実際にかけて単位行列になるか確かめてみると良い。

また、異なる α 、 i の P_{ij} の積はこのように表すことができる。

連立一次方程式の数値解法

□ 前進・後退代入

- 具体例 $A x = L U x = b$

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & -1 \\ -1 & 1 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

- Step 1

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

- Step 2

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix}$$

連立一次方程式の数値解法

□ 前進・後退代入

- 前進代入

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

- y_1, y_2, y_3 の順に代入計算する

$$\begin{cases} y_1 = b_1 \\ y_2 = b_2 - 1/2y_1 \\ y_3 = b_3 + 1/2y_1 - y_2 \end{cases}$$

$$y_i = \left(b_i - \sum_{j=1}^{i-1} l_{ij} y_j \right), \quad i = 1, 2, \dots, n$$

連立一次方程式の数値解法

□ 前進・後退代入

- 後退代入

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix}$$

- x_3, x_2, x_1 の順に代入計算する

$$\begin{cases} x_3 = y_3 \\ x_2 = (y_2 + 3/2x_3)/(3/2) \\ x_1 = (y_1 - x_2 - x_3)/2 \end{cases}$$

$$x_i = \left(y_i - \sum_{j=i+1}^n u_{ij}x_j \right) \times \frac{1}{u_{ii}}, \quad i = n, n-1, \dots, 1$$

連立一次方程式の数値解法

□ 前進・後退代入

- 一般に行列の次元が n の場合、 $L y = b$ の解

$y = [y_1, y_2, \dots, y_n]^T$ は以下で求められる

$$y_i = \left(b_i - \sum_{j=1}^{i-1} l_{ij} y_j \right), \quad i = 1, 2, \dots, n$$

- また、方程式 $U x = y$ の解 $x = [x_1, x_2, \dots, x_n]^T$ は以下で求められる

$$x_i = \left(y_i - \sum_{j=i+1}^n u_{ij} x_j \right) \times \frac{1}{u_{ii}}, \quad i = n, n-1, \dots, 1$$